

## 第12話 赤穂義士の復讐

武勇の氣風が失せて、上下の風俗が頗る乱れた元禄時代に、古今無比の義拳を  
 企て、武士道を發揮して、人心を新たにした赤穂義士の復讐事件。

時は元禄 15 年 12 月 14 日、夜もはや更けて、暁 近い午前 3 時ごろに、折柄、皎々と冴渡る月光  
 に雪を踏んで、ところは、本所松坂町の吉良上野介義央の邸に、同勢凡そ 4 ~ 50 人の者が肅々と  
 近寄って行ったかと思うと、忽ちどつと表と裏との両門から討入って、首尾よく其家の主人義央を討つ  
 てその首を取った。といったら、読者はもうこれが赤穂義士の復讐であることが分かるでしょう。

そうです。それほどまでにも此の事件はその時以来、広く国民の間に伝えられて、今は世間に 1 人  
 として知らぬ者はいないまでになっています。

それで、今、ここにはその一通りの筋道だけを簡単に述べることにする。

### 勅使の下向とその饗応役

そもそも江戸幕府では、朝廷に対して敬意を表するために、毎年正月に、使いを京都にのぼらせて年賀  
 を申し上げさせ、朝廷はこれに対して、勅使を江戸に下して満足の意を示されるのが例になっていた。第  
 113 代 東山天皇の元禄 14 年の春、勅使（大納言柳原資廉、権中納言高野保春）並びに靈元上皇の  
 院使（権中納言清閑寺照定）が東下されるに当り、幕府は勅使饗応役を播磨赤穂の藩主浅野内匠頭長  
 矩に、院使饗応役を伊予吉田の藩主伊達左京亮宗春に命じ、且つ儀式の事にくわしい高家（註：幕府  
 の職名、接待やその他の諸儀式の事をつかさどる役）の筆頭吉良上野介義央をその指図役と定めた。

ところが、この義央は、この時 61 才の老人でしたが、狡猾で意地が悪く、進物の多寡によって指図  
 を加減するという貪欲漢でしたので、今度、富裕の評判の高い浅野長矩が饗応役になったに就いては、  
 必ず莫大な贈物を持って指図を頼みに来るにちがいないと、心中ひそかに喜んで待っていた。

### 吉良上野介

それとも知らない浅野家では、儀式の指図は、高家の当然の役目であるし、殊に上野介は従四位上、  
 左近衛少将という身分の高い人でもあるので、賄賂がましい進物などを贈っては却って不敬になろうか  
 らと、先づ家老が僅かの品を持って挨拶に行っておいて、そのあとから、長矩が自ら吉良の邸に至り、上  
 野介に逢って、万事の指図を頼んだ。

ところが、上野介は、けんもほろろの挨拶で、至極冷淡な態度を見せた。

### 浅野長矩

根が廉潔で、正直一途な長矩には、これが進物の少ないための上野介の不満だとは分からなかつ  
 た。彼はただ上野介を意地の悪い老人ぐらいに思ったので、どこまでも下手に出て、重ねて頼むと、上  
 野介は、それほどまでに言われるならばと、さも勿体そうに、勅使、院使に対しては、日々進物を差上げ

## 第12話 赤穂義士の復讐

るよう、その他これぞと思う人々にも手落ちの無いように進物を差し上げるようにと言った。

もちろん、勿論、これは自分のところに持って来いと謎でしたが、廉潔な長矩にはそれが分からなかった。のみならず、彼は日々の進物というのに不審を抱いて、老中土屋相模守政直にこれをただした。そして、吉良の指図とはいえ、それほどまでにするには及ばないという答えを得た。

あとでこの事を上野介が聞いて大いに驚き、且つ怒って、「進物の事を老中になど訊く奴があるか！馬鹿者めが！内匠頭は吝嗇で物を惜しむ上に、我に恥辱を与えおる。今に大きくじりをさせてくれるぞ！」とひそかに彼は心に期した。自分の本心を老中に悟られたかも知れないと思ったのです。

それからというもの、一方で、彼の人柄を知って少なからぬ金品を贈った伊達家に対しては、万時親切に指図したのに反して、内匠頭に対してはなすべき指図をもしないばかりか、何かにつけてしくじらせようとしてのみいた。

そうこうするうち、勅使、院使は3月11日に江戸に着かれたので、いよいよ饗応役の勤めがはじまった。

### 上野介の悪意

ところが、現にその日の如きも、浅野家では早朝からご馳走の用意をして、いつでも食事を差上げられるようにしていると、吉良家から使いがあつて、「今日はお三方共に、大切なご精進日の由であるので、お料理に肉類はお用いなきように」といって来た。だしぬけの通知に変だとは思つたが、ともかくもと、急いで精進料理の注文をして、その用意をもした後に、院使饗応役の伊達家に間合せてみると、そこへは吉良家から何の注意も無いということでした。

又、勅使、院使は、第1日に天皇、上皇のお言葉を将軍に伝え、第2日に幕府の饗応を受け、第3日に将軍奉答の式に臨み、その後で芝の増上寺と上野の寛永寺とに参詣されるのが例となっていたが、その際、勅使がご休憩になる寺の畳は、表換をすべきかどうか内匠頭には分からなかった。その指図を吉良に問うと、「それには及ばない」とのことであつたので、そのままにしていると、その日も間近になつて、院使のご休憩所の畳は伊達家で残らずそれを取換えたことが知れた。内匠頭は大いに驚き、急に命じて一夜のうちに200余畳の畳換をさせたりしたこともあつた。

### 殿中の刃傷

しかし、ともかくも、3月12日の聖旨伝達の式も、13日の幕府饗応も無事に済んで、いよいよ今日は3月14日、将軍奉答の式日となつた。式場は江戸城内の白書院で、万端の用意は疾に整い、御三家を始め、幕府の諸役も、諸大名、陸続としてすでに殿中に集まつた。この時、内匠頭は式場近くの廊下に控えていたが、上野介に向つて、勅使お着きの節、お玄関のどの辺でお迎え申すべきか、お指図をお願いしたいと、といった。すると、上野介は大声をあげて、「左様なことは、ふだんから心得ておるべき筈のこと。今更、何をとぼけてお尋ねなさる。指図をすべき限りではない」と、さも憎そうにどなりつけた。

## 第12話 赤穂義士の復讐

たくみのかみ ぶれいもの でんちゆう いか おさ がまん  
内匠頭は、無礼者めが、とは思ったが、殿中ではあり、ちっと怒りを抑えて我慢していたところへ、  
つなよし み だいどころ かじかわよ そうべ えよりてる たくみのかみ み だいどころ  
綱吉の御台所のご用人梶川与三兵衛頼照が出て来て、内匠頭に、今日は御台所からも勅使にお礼を申  
し上げる筈ですから、式が済み次第、お知らせ下さるように、と言った。内匠頭が承知の旨を伝える  
そば こうづけのすけ でむか さほう  
と、側にいた上野介が梶川に向かって、「御用があるなら、わたしに言って下さい。出迎への作法も知ら  
ない田舎漢を当てにしていると何をしでかすか分かりませんぞ」と言った。

これを聞くと同時に、さっきからぢりぢりしていた内匠頭は、もはや我慢が出来なくなって、思わず腰  
の小さな刀を抜くより早く、「重なる遺恨おぼえたか」と呼ばわりながら、上野介の背後から切りつけ  
た。上野介が驚いて振り返るところを又一太刀、眉間を切った。与三兵衛が驚いて、駆け寄って内匠  
頭を抱き留めると、一方、上野介の同役らも駆けて来て、額をおさえて転がっている彼を扶けてその場  
を退いた。

たちま でんちゆう じこく せま たくみのかみ だいやく  
忽ち殿中は上を下への騒ぎとなったが、折柄、時刻も迫っていたので、將軍は急に内匠頭の代役を  
しもふさくら と だ の の か み だ だ ざ ね くらしよん と ど お  
下総佐倉の藩主戸田能登守忠真に命じ、式場を黒書院に改めさせて、滞りなく奉答の式を済ませた。

### あさのながのり せつぷく 浅野長矩の切腹

さて幕府では吉良、浅野の兩人を別々に取調べた上、上野介には、手創を療治した上、治り次第、  
もとの通り相勤めるようにとの事で、何の咎めも無かったが、内匠頭には、「場所柄をも弁えず、刃傷  
に及びたる段、不届き至極につき」とあって、切腹を命じた。死はもとより期しているところで、内匠  
頭はつつしんでこれをお請けして、その日の夕方、お預け先となる芝愛宕下の田村右京太夫建頭の邸で、  
かぜさそ おわれ はる なごり  
風誘う花よりもなほ我はまた 春の名残をいかにとかせん

という辞世の歌を残して、従容として切腹した。時に年は35才でした。

幕府は更にその日のうちに京橋の鉄砲州に在った浅野家の邸宅を没収し、翌日、長矩の仮世継と  
なっていた弟長広(大学)に閉門を申付けた上、赤穂の領地をも没収することに決した。

この14日の刃傷事件の知らせが赤穂にとどいたのは18日の夜の10時頃でした。続いて翌19日の  
朝の6時ごろには、内匠頭切腹の凶報が届いた。一番の驚きと悲しみとは想像にあまりある。この  
時、赤穂に在って、よく人心の動揺をふせぎ、極めて適切に善後の処置を講じたのが国家老の大石内蔵助  
よしお  
良雄です。

### おおいしよしお 大石良雄

ふじわらひでさと よ よ おうみのくにおおいし しょう  
大石氏はもと藤原秀郷から出た。世々近江国大石村に住んでいたために、大石氏を称したのです。  
よしお そうそ ふよしかつ はじ つか かるうしよく よしお まんぢ  
良雄の曾祖父良勝が始めて浅野家に仕えて以来、代々家老職をつとめていた。良雄は万治2年の生ま  
れで、その教養時代ともいべき8才から17才までの10年間が、ちょうど軍学者山鹿素行が幕府に逐わ  
れて赤穂に来ていた時でしたから、これに就いて兵学山鹿流の奥義を極め、一方、讃岐高松の劍客  
おくむらけんざえもん つ けんぼう いとうじんさい つ かんがく おさ ぶんぶりようどう  
奥村権左衛門に就いて剣法を学び、又、京都の学者伊藤仁斎に就いて漢学を修めた。いわゆる文武両道  
の達人でした。15才の時に父を失い、19才の時に祖父を失ってその後を継いだ。こうしてこの大事件



## 第12話 赤穂義士の復讐

よく行き届いていたので、正副両使は非常に感服したといわれる。又、その引渡し目録の中には、飼犬5匹の牡牝、毛色、年齢、病気の有無まで明細に書き記してあったが、これは言うまでもなく、例の犬族保護の令の趣旨に副った取り計らいで、古往今来、城の明渡しに犬の目録のあったのは、この時だけだったといわれる。

こうして良雄ら藩士一同は、住みなれた城を出ると、打ち揃って浅野家の菩提所である華岳寺に参詣の上、解散した。

今はみんなが浪士です。彼等は思い思いに離散して身の落着きを求めなければならない。良雄は6月25日、開城後の残務や何かを一切処理した上で、赤穂を去った。

### 山科の閑居

彼は京都の近くの山科に住んで、ひそかに同志と密議を通わしながら、時機の来るのを待つことにした。ところが、血気にはやる若い連中の中には、一日も早く復讐を決行しようと促す者もあるし、と思えば、一旦、固い誓詞を納れた者の中にも盟約を破ろうとする卑怯な者も出て来た。しかも一方、吉良家のほうでは、赤穂浪士の復讐を恐れて、厳重な警戒をしている上に、ひそかに多くの間者を各地に放って、良雄以下の重なる赤穂浪士の様子を探らせた。

### 良雄の遊蕩

それやこれやの間に在って、良雄は非常に苦心した。初めは悠々と京都付近の名所見学などに日を送っていたが、後には、京都や伏見の名高い料理屋に遊んで、わざと金銭を湯水の如くに使ったり、酒に酔って、大道に倒れて、高躰をかいたりするような、誰が見ても、とても復讐などしそにもない道楽者に成下がったように振舞って、吉良家の間者の目を眩ましながら、一方、ひそかに血気に逸る同志を宥めると共に、所々に散在している同盟者の本心を確かめて、真の忠臣だけの結束を図っていた。

ところが、その年の12月、吉良上野介義央は養子の義周に譲って隠居したが、長矩の家は、良雄らが嘆願して只管その再興を祈った甲斐もなく、翌15年7月18日に幕府が大学の閉門を免し、本家である広島浅野家へ妻子共に引取るようにと命ずるに至って、全くその望みが絶えた。

今はもう何を躊躇していることもなかった。良雄は急に同志を集めて、かねて覚悟の復讐をいよいよ決行することにした。

こうして、同志の者らが次第に江戸に向って出発したあとから、先づ長男の良金（主税）を出発させて、ついで自分も出発した。11月5日に良雄は江戸に着いたが、それより同志の者らと復讐の手段をめぐらし、ついに12月14日の夜に吉良邸に討ち入って本望を達したのです。

この日、吉良邸では茶の湯の夜会があって、客が散じたのは遅かったが、さすがに夜半を過ぎる頃には、一家皆寝静まってしいんとしていました。

### 義士の討ち入り

折からの月光に雪を踏んで、討ち入った赤穂浪士はすべてで47人でした。表門からは良雄以下23人、

## 第12話 赤穂義士の復讐

裏門からは良金ら 24 人です。 目指すは義央一人ですので、逃げるものには目をかけず、手向かうもののみ突き伏せ、斬り捨て、まっしぐらに義央の寝間に乱入したが、彼はもうそこにはいなかった。 けれども、夜具の温みで逃げ去ってまだ間がないことがわかったので、すぐに八方に手を分けて家捜しした。そして、さんざん捜しあぐんだ末に、やっと炭部屋の中に彼を見つけて、首尾よくこれを討ち取ったのです。 — しかし、多分、読者はこういう巨細の事もすでに何かの雑誌か本で読んで知っているでしょう。



江戸 両国の吉良邸

赤穂義士の討ち入り

さて、良雄ら 47 人は、僅かに手傷を負うた者が 1 両人あっただけでしたので、一同打揃って、芝高輪の泉岳寺に引揚げ、主君浅野長矩の墓前に上野介の首を手向けて、首尾よく復讐を遂げたことを報告した。 それと同時に、良雄は同志吉田忠左衛門兼亮、富森助右衛門正因の両人を芝愛宕下の幕府の大目付仙石伯耆守久尚の邸にやって、事の次第を自首させた。

## 第12話 赤穂義士の復讐

幕府はこれに対して一先づ彼等を4組に分け、肥後熊本の城主細川綱利（その邸は芝高輪）、伊予松山の城主久松定直（その邸は芝愛宕下）、長門長府の城主毛利綱元（その邸は、麻布日懸ケ窪）、及び三河岡崎の城主水野忠之（その邸は芝切通、金地院前）の四家にお預けにしておいて、さて、いかにこれを処分すべきかを評議した。

### 吉良家の処分と義士の切腹

この頃にはもう此の事件が広く世間に知られて、義挙としての評判が高く、一般の市民は勿論、幕府の諸役人のうちにも、義士に対する同情がさかんに起こって、その助命を望むものが非常に多かった。將軍綱吉もまた、例の忠孝をもって世を教化しようとしたほどの人ですから、大いに彼等の忠節を賞して、情においてはこれを助けたいと思っただが、しかし、徒党を結ぶということは、幕府の予ねて固く禁じていたところであるし、殊に將軍のお膝元をも憚らず、敢えて、幕府の高位高官の者の邸に押入り、これを討ち取ったのを赦しておいては、天下の法が立たないわけでもあるので、幕府は大いに評議を凝らした末に、ついに翌16年2月4日、一方の吉良の領地を没収して、義周を信濃の高島——今の諏訪——に流すと共に、義士一同には切腹を命じた。

それで、その日の暮方、彼等はそれぞれ預けられていた四家において潔く切腹したが、この時、良雄は45才、良金は最も若くて16才でした。良金のつぎには矢頭右衛門七教兼の18才が若く、最年長は77才の堀部弥兵衛金丸でした。

### 泉岳寺に葬る

しかも彼等の遺骸は、その生前の願いに任せて、泉岳寺にある亡君の墓側に葬ることを許された。実に、どこまでも忠義の志を憐れむと共に、一方で、天下の法を正したのであって、これを見ても、いかに幕府が止むなく彼等を処罰したかもわかります。

### 赤穂義士の誉れ

爾来、300年余り、赤穂義士の誉れはますます高く、今になお泉岳寺の墓の前には、香華の絶えることがないのです。

明治天皇には、明治元年に初めて東京に行幸された時に、時に勅使を泉岳寺に差遣され、「汝良雄ら、固く主従の義を重んじ、仇を復して法に死す。百世の下、人をして感奮興起せしむ。朕深く之を嘉す。」という勅語を義士の墓前に手向け



東京港区高輪 泉岳寺 赤穂義士の墓

られた。実に、良雄らの義烈は千古に朽ちずに、永遠にその芳名を伝えていきます。

（ 第12話 赤穂義士の復讐 終わり。 次は前頁に戻り、第13話 新井白石の弊政改革 に ）